

## 求道の哲学者 岩田靖夫先生

田 中 享 英

今はもう昔のことになるが、私には西洋古典学会というと必ず思い浮かぶ一つの情景がある。それは学会の研究発表会場の最前列の、しかも発表者の真ん前の席にいつも決まって座っておられた、田中美知太郎先生の後ろ姿である。たいていの人なら尻込みするであろうそういう場所に、早い時間からポツンと坐って発表を待っておられた田中先生のお姿に、私は先生の西洋古典学会への並々ならぬ愛情というか、真剣さを感じたものであった。

今回学会から私が仰せつかったのは、つい一昨年春に亡くなられたばかりの岩田靖夫先生の生涯とお仕事についてのご報告の文章であるのに、いきなりこんな田中先生の思い出を持ち出したのは、じつは岩田靖夫先生についてもやはり古典学会の発表会場で、こんどは発表者への質問の時間に、いつも岩田先生の見事な質問の仕方に私が感心させられていたということに一言触れておきたかったからである。これはおそらく私以外にも気づいておられた方々がおられるにちがいないと思うのだが、岩田先生は、哲学の若手の研究者の発表が終わると直ちに手を挙げ、いつも先ず相手の発表の主旨を、先生ご自身の言葉で手短かにまとめ直してから質問に移るというやり方をとっておられた。私が感心し、有り難かったと言うのは、その見事なまとめかたのことである。哲学の分野の発表は、文学や歴史といった他の分野の学会員にとっては必ずしもいつも分かり易いとは限らないと思われるのだが、岩田先生はそれを、会場のだれにも分かるように明快にまとめ直して下さった。その解説が、哲学を専門とする私にとってさえ屡々たいへん有り難く、今の話になるほどそういうことだったのかと納得できたことが再々あったのである。これが先生の頭脳の抜群の明敏さの然らしむるところであったことはことさら指摘するまでもないであろう。

### 『アリストテレスの倫理思想』と『アリストテレスの政治思想』

岩田靖夫先生のご経歴とお仕事は別掲の一覧表の通りであるが、とくにそのご著作について言える大きな特色は、何よりも、いま上にも触れたような論述の平易さと明快さにある。そしてそれが何に由来するかといえば、それらの作品がすべて、先生ご自身がご自分の言葉で、真摯かつ誠実に考え抜かれた思索から生まれたものであることによると私には思われる。先生の数々のご著書の中で燦然と輝くのは何と言っても、衆目の見るところ、『アリストテレスの倫理思想』と『アリストテレスの政治思想』の二大学術書であろう。

前者のあとがきで先生は、「わが国でもアリストテレスの哲学は着実に研究されはじめていて、個別的なテーマについてのすぐれた論文がいくつも現れてきているが、かれの哲学のどの領域についてであれ本格的な研究書は未だ書かれていない」として、「かれの思想の細部にメスを入れながら、その全体的構造を呈示するという課題にあえて立ち向かおうとした」とその意気込みを記しておられるが、その通りこの二著は、以後この国でアリストテレス研究に志すわれわれ後輩すべてにとっての道標となった。

これら両著における先生のアリストテレス理解はきわめて明確かつ率直であるので、私たち読者もまた、それらに対する私たち自身の態度決定を迫られることになる。たとえば『アリストテレスの倫理思想』において先生は、「アリストテレスは万人に幸福（善、徳）への可能性を開いた」と述べ、かれの思想がこの点では、「徳」が学習や修練によって得られるとしたソフィストたちやアンティステネスに近く、プラトンの貴族主義的な立場に対立すると主張される。またこの書の序章でまず初めに表明される、「アリストテレスは倫理的探求の出発点として「多くの人々の是認する考え」（エンドクサ）を基礎に置いた」という先生の洞察は、私たちが哲学という学問の対象と方法をあらためて理解しようとするときに大きな示唆を与えてくれるように思われるが、これについても先生は、「イデア」論を基礎に置くプラトンの真理観を大きく転換するものであると見ている。

もう一方の『アリストテレスの政治思想』においても、岩田先生の歯切れのよさは一貫して変わらない。アリストテレスの「倫理学」は個人としての人間にとっての最高善（幸福）の探求であったが、かれの「政治学」は人々の共同体であるポリス（国家）においてその幸福を実現するためにどのような国制を採用すべきかを探求する。したがって議論は倫理学から直接に政治学へと接続するわけだが、実際にはこれら二つの学問の探求方法には大きな違いが見られ、『政治学』の議論はより経験的実証的であり、現実のギリシャの諸ポリスの国制がさまざまに分析される。したがってアリストテレスが最終的にどの国制を理想としたかが見定め難く、研究者たちの見解も分かれることになる。しかしここでも先生の炯眼は、アリストテレスが到達した理想が、「有徳な人々のデモクラシーとしてのいわゆる中間的国制」であったことを見抜き、「アリストテレスは、等しく自由な、等しく理性的な、等しく有徳な、平等な人間たちの共同体という理想を、現代の私たちに残した」と結論するのである。

ただしこのような結論に、私たちのだれもが、アリストテレスの論述からすんなりと自然に到達できると考えてはならない。ギリシャでは伝統的に「市民」と認められたのは、両親が自由市民である成年男子のみであり、奴隷や居留外国人はもちろん、市民の子でも女性は除外された。そしてアリストテレス自身もそれをそのまま容認していたのである。

それどころか奴隷制度についてはアリストテレス自身が、「理性を欠き肉体能力のみによって生きる、自然本性による奴隷というものが存在する」という、奴隷正当化論までも試みている。岩田先生はこういった事態の中で、まず、アリストテレスが別の章で提示している市民の定義、すなわち「本来の意味での市民とは判決と支配に関与する者である」との画期的な発言に着目し、アリストテレスがここから上述の平等主義の理想を導出したことを確認し、他方かれの奴隷制度正当化論については、先生はこれがアリストテレス自身の「人間は理性的動物である」という人間の定義に正面から矛盾撞着すること——しかもアリストテレス自身がその不整合に気づいていたことに着目して、これらの間の軋轢のエネルギーがいわばアリストテレス思想そのものの中に内蔵された「起爆力」としてはたらき、その後の人類の思想を動かしたと論じたのである。

この『アリストテレスの政治思想』が出版されたのは、『アリストテレスの倫理思想』上梓の25年後岩田先生が77才の時、その諸章は先生の60代後半から70代にかけての執筆である。私たち読者はその議論に、先生の思想の新しさと円熟を共に味わうことができるように思うがいかがであろうか。

## 実存と絶望と信仰

岩田先生が東京大学文学部哲学科に入学されたのは1951年（昭和26年）で、1956年に卒業、つづいて同大学院に進学された。先生がなぜ哲学科を選ばれたかについてはお聞きしたことがないが、もともと「いかに生きるべきか」という「倫理」の問題に関心があったと、後にご著書で書いておられる。当時はまだ第二次世界大戦が終結してようやく10年が経つ頃で、人々が伝統的価値を見失い、それに代わる普遍的価値観を模索していた時代であった。先生は、学部では充実した教授陣の下で広く西洋哲学を勉強されたが、大学院の修士論文の対象としてはアリストテレスの『ニコマコス倫理学』を選択された（「アリストテレスにおける人間と倫理」『哲学雑誌』74巻742号[1959]）。このときの指導教授は斎藤忍随先生であったが、斎藤先生はもともとニーチェやショーペンハウエル等のドイツ哲学研究からギリシャ哲学へ移られた方で、それだけに新鮮な情熱を傾けてギリシャの叙事詩、悲劇、歴史の世界に遊んでおられた。その広い関心と見識を岩田先生がほとんどそのまま継承されたことはすでに修士論文において明らかであるが、さらに先生の32才の時の『西洋思想の流れ』（原佑、伊藤勝彦、渡辺二郎と共著[1964]）では、「アレテー」「モイラ」「ディケー」といった概念の説明に、ホメロスをはじめ、アイスキュロス（『ペルシャ人』『アガ멤ノン』）、ソフォクレス（『アンチゴネー』）、エウリピデス（『ヒッポリュトス』）、そしてツキディデスなどの用例が自由に縦横に引用されているのに驚かされる。

しかし他方、上に述べた混迷した戦後の思想界では実存主義の哲学が世を風靡していた。デカルトに始まった近世合理主義の哲学は、カント以降のドイツ観念論を経てヘーゲルの壮大な哲学体系に到達していたが、そういった理性的普遍的な知識体系とは別に、つねに死に向き合っている個人としての自己に目を向け、自らのあり方と生き方を探求しようとしたのが、キルケゴール、ヤスパース、ハイデガー、サルトルなどに代表される実存哲学であった。この新しい時代思想に、若き日の岩田先生が鈍感でいられたはずはなかった。30代40代の先生は、専門のギリシャ哲学研究とつねに並行して、それに勝るとも劣らぬ熱意をこの新時代の哲学に傾け、これをご自分の中に吸収された。その道程を鮮明に再現して見せてくれるのが『神の痕跡——ハイデガーとレヴィナス』（1990年）であり、またこれに続く何冊かのご著書である。

『神の痕跡』を構成する主な章は、I.「自由と運命：ソフォクレスの悲劇的人間像」、II.「存在への接近：ハイデガーの根拠」、III.「存在とは違って：レヴィナスの神」などである。この書の「あとがき」で先生は、この第I章について、つぎのように述べておられる。「…その頃、私はすでに素朴な明るさを失っていた。あふれ出る自我を抑えきれずに、暗い青春の反抗のうちで、私はサルトルに心酔していた。私はかれの「無化する自由」と「不条理な存在」という思想のうちで、あらゆる束縛を破り捨てて自己自身を解放しようとする創造的人間の絶対的自己肯定の企てを見、それと同時に、このような企てもまた、人間的自由の有限性のゆえに、挫折へと定められた無益な受難であらざるをえない宿命を見たのである。このとき、以前より親炙していたギリシャ悲劇、就中、ソフォクレスのオイディプス王のうちに現われる悲劇的人間の原型が、この宿命的絶望の心境と反応した。その反応の産物がこの論文である。私はここで、オイディプス王のうちに、人間の悲劇性の本質的な存在論的構造を確認しようとした。そしてその帰結として、悲劇とは人間の本質に根差す出来事であること、したがって人間には救いがないこと、救いがありうるとすればそれはただ諦念でしかありえないことを語ろうとした。」

岩田先生はここでご自分の若き日の「絶望」について語っておられる。「絶望」は、哲学者たちの用語では「ニヒリズム」である。20世紀の実存哲学は、少し乱暴な言い方をすればすべてニヒリズムであった。つまり「神」を見出すことができない哲学であった。岩田先生の見るところ、その20世紀最大の哲学者がハイデガーだった。そこで先生は、いわば全身全霊をもってこの哲学者の諸著作と対決し、その中にニヒリズム克服の光を見出そうとした。この格闘の跡は、『神の痕跡』以後のほとんどすべての著作に認めることができる。これはいいかえれば、先生のハイデガーへの尊敬と期待がいかに大きく深いものであったかを証ししているとも言える。（先生はかれの『形而上学入門』[ハイデガー全集第40巻 創

文社 2000 年] ほかの翻訳をも、世に出されている。) だがそれにも拘わらず先生のその願いは満たされなかった。

しかしハイデガー哲学との長い対話の後に、先生にとって幸いなことに、ユダヤ人の哲学者レヴィナスとの出会いが待っていた。『神の痕跡』の「あとがき」をもう一度引用しよう。「私がレヴィナスの名をはじめて知ったのは約 10 年前である。1979 年に私はルーヴァンにいたが、そのときたまたま、パリからレヴィナスが集中講義に来たことがあった。私は一週間ばかりその講筵に欠かさず出席していたが、ハイデガーは自分の死ばかり考えていて他人の死を考えないから駄目だ、と批判しているらしいことがおぼろげに解っただけで、それ以上には、レヴィナスがなにを語っているのかほとんどまったく頭に入らなかった。もちろん私のフランス語が拙かったせいもあったろうが、そればかりではなかったらしい。ベルギー人も、あのフランス語は解らない、と言っていたからである。その理由は、おそらく、こういうことであろう。レヴィナスの文章は、普通のフランス語の語義とシンタックスに従って読めば読めるが、なにを言っているのか皆目解らないのである。なぜそういうことになるのかと言えば、レヴィナスの言葉の背後には、なにか固有の異常な体験がひそんでいるからである。かれはこの“体験”を語ろうとしているのである。…」岩田先生はこのときのレヴィナスの顔に、「誠実さ」そのものを見たと書いておられる。

今日、レヴィナスの名はわが国でも広く知られるようになり、かれの名と共に「他者」という日本語がすぐに思い浮かぶようになった。レヴィナスによれば「他者」とは私たちが勝手にそこに踏み入ることができない領域であって、否応なしに神を体験させられる場所である。かれによれば、ギリシャに始まりハイデガーにまで到達した西欧の哲学はすべて、真理を探究しその真理のすべてを自己自身のうちに取り込むことによって自由を実現しようとする自我中心主義の哲学であった。だがこれは、自己と異なる存在、自己を超越した実在を認めない点で、本質的に無神論とならざるをえない。そしてこの無神論が人間を破滅の淵に追いつめつつある、というのである。

## 講演集『よく生きる』

私は岩田先生がいつキリスト者になられたかはお聞きしていない。しかしご著書から窺い知るかぎりでは、先生はお若い時から哲学と信仰を分けておられたように思われる。前に言及した『西洋思想の流れ』の中ですでに先生は、ギリシャ人の開拓したヒロイズム、自由の尊重、そして合理主義が、人類を繁栄へ向けて前進させた大きな光明であったとされた上で、人間性のうちにはギリシャ人の触れえなかった、真理のもう一つの面がある、それは悪の問題、苦しみの問題、死の問題、愛の問題、誠実の問題であるとされ、その真

理の他の面こそキリストの福音がもたらした人間観である、と述べておられた。先生のこのお立場は、基本的には生涯変わることがなかったと言ってよい。そしてさらに前述のレヴィナスとの出会いが契機となって、先生が思索の方向をより一層ユダヤ・キリスト教の信仰の方に向けられるようになったことも確かである。

岩田先生の70才代は、先生の長年のご研鑽と思索がつぎつぎとご著書として世に送り出された、実り豊かな収穫の時期であった。しかもそのご著書の多くは親しみやすい新書版の体裁で、文体も、広く一般の読者に語りかける平易で滋味溢れるものとなっている。それはひとつには、それらが、先生が晩年に所長を務められた仙台白百合女子大学カトリック研究所での、折にふれてのご講演にもとづいていることにもよるだろう。なかでもとりわけ、先生が73才の時に出版された『よく生きる』（ちくま新書 2005年）は、先生が到達されたご自分の最終の境地を、この上なく平明に述べられた、この上なく美しい一冊である。

ここで先生は、私たちにとっての幸福は競争社会の中での自己実現にあるのではなく、むしろ自己主張を捨てて他者と交わることの中にあると説き、かつて日本の浄土真宗で「妙好人」（聖人）と呼ばれて人々から慕われた「因幡の源左」にまつわるいくつかの話を紹介している。それらが言おうとしているのは結局、幸福には何の資格も要らない、なぜなら愚者凡人を救済することが阿弥陀様の本願（「悪人正機」）なのだからというところにある。そして岩田先生はこれが、キリストの、「私は義人を呼ぶために来たのではなく、罪人を呼ぶために来た」という言葉に一致すると指摘する。

先生によれば、しかし、実はこれが本来の原初のユダヤ・キリスト教のすがたであったのだが、その後の歴史の中で、キリスト教神学が、ギリシャの哲学者パルメニデスに由来する不生不滅永遠不変な存在という神概念と、アリストテレスの、完全なる存在である自己自身をのみ思惟対象とする神という概念を受容してきた過程で、愛としての神の内実が見失われたという。しかし新約聖書の「神は愛である」という言葉は、神が自己自身の中で自足していないということの意味する。神は愛であるがゆえに切に他者を求め、切に他者を求めたがゆえに世界と人間を創造したのだ、と先生は言われるのである。先生はこのお考えを、このご本の中できわめて謙虚なかたちで示唆しておられるのだが、これはまさにヨーロッパのキリスト教神学の伝統に対して正面から再考を迫る「岩田神学」の提唱であると言えるだろう。

私たちの国では福沢諭吉以来、つまり明治以来、先進の西洋文明の摂取学習に全力を挙げてきた。これは私たちの生活の全ての面について言えることで、学問と文化についても、いまだに欧米の最新の思想の紹介が私たちの仕事の大部分を占めているのが、残念ながら

実情である。そういう中で、以上に紹介した、岩田先生独自の世界を展開したいくつものお仕事はひとときの輝きを放っていると私には思われる。そしてそれを生み出したのは、一つには先生の、ご自身に誤魔化しを許さぬ誠実さであり、もう一つは先生の広く深い識見、とりわけ西洋古典学の学殖である。自分とは異なる伝統を有する他の文明に対して対等の友として渡り合うには、その文明をその源泉から理解するに如くはない。今回岩田先生の生涯にわたるお仕事を勉強し直す機会をもつことができたおかげで、何にもましてあらためてそのことを痛感した次第である。